

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

最後の忠臣蔵

2010年・日本映画
配給/ワーナー・ブラザース映画
133分

2010 (平成22) 年 12 月 19 日鑑賞

梅田ピカデリー

Data

監督：杉田成道

出演：役所広司／佐藤浩市／桜庭な
なみ／安田成美／片岡仁左
衛門／伊武雅刀／笈田ヨシ
／山本耕史／風吹ジュン/
田中邦衛／柴俊夫

👁️👁️ みどころ

討入りに1人は参加できず、1人は途中で抜け出したのは一体なぜ？なるほど、こんな忠臣蔵秘話もあったのか！武士とはつらいものだ。

役所広司と佐藤浩市の熱演は見モノ。そして、映像の美しさも出色。しかし、ヒロインの美しさと演技力はイマイチ？そして、人形浄瑠璃「曾根崎心中」とのコラボ(?)には、異議あり！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□なるほど、こんな視点も■□

47人の赤穂浪士が吉良邸へ討入った12月14日が近づくと、あちこちで忠臣蔵のドラマが演じられるが、はっきり言ってこれはもう見飽きている。しかし、「四十七人の刺客」(92年)に続く池宮彰一郎の原作『最後の忠臣蔵』を映画化した本作は、忠臣蔵という言葉は付いているものの吉良邸討入り→大願成就→切腹というハイライトシーンから、16年後の物語。

その主人公は、共に死ぬべき運命を受け入れ、討入りの任務を遂行しようとしていた大石家用人の瀬尾孫左衛門(役所広司)と足軽の寺坂吉右衛門(佐藤浩市)の2人。彼らは主君の大石内蔵助(片岡仁左衛門)からそれぞれ新たな任務を与えられたうえ、「死んではならぬ！生きろ！」と命じられたため、「命を惜しむ卑怯者」の汚名を着せられながら、16年間生き抜いてきた。寺坂吉右衛門の任務は「討入りの真実を後世に伝え、浪士の遺族を援助せよ」というものだったが、最後の1人、茅野きわ(風吹ジュン)への報告によってその任務はほぼ終了。そして今は、京で行われる四十六士の十七回忌法要に参列すべく、内蔵助の又従兄弟である進藤長保(伊武雅刀)の屋敷でしばらく逗留することに。他方、

瀬尾孫左衛門は？

■□孫左衛門の任務は？それは2つの意味でちと過酷？■□

孫左衛門が内蔵助から授けられた任務は、内蔵助と愛妾・可留（かる）との間に生まれようとしている隠し子を育てよというもの。孫左衛門は「一瞬そんなバカな？」と思ったはずだが、主君の命令は絶対。そこで、孫左衛門は恥を忍んで討入り前日に逐電したが、以降赤子を抱えた孫左衛門の生きざまは？

今、可音（かね）（桜庭ななみ）は16歳。島原の元太夫だったという近隣に住む女・ゆう（安田成美）の指導よろしきを得て、行儀作法から読み書き、芸事までパーフェクトな美女に育っていた。生まれた子が女だったから、可音を立派に育てあげたうえ、しかるべき男（家）に嫁がせるまでが孫左衛門の任務。しかし、その任務は2つの意味でちと過酷？第1に討入り前日に恥を忍んで逐電せ

ざるをえないということ自体が過酷だが、生まれたばかりの女の子を男手一つで育てあげ、嫁入りさせるという任務は別の意味で超過酷？孫左衛門自身が名前を変えて世間から身を隠し、武士の身分を捨てて骨董を売買する商人となって生計を立て、竹林の奥の隠れ家に



最後の忠臣蔵

DVD 税込3,480円

ワーナー・ホーム・ビデオ

©2010 『最後の忠臣蔵』製作委員会

可音と2人で住んでいるのだから、外の世界と接触していない可音はどうやってボーイフレンドを見つけるの？また、「見合い話」を進めるについても、出生の秘密が明かされないまま50歳近いおっさんと2人で住んでいるワケあり美女を、誰にどうやって紹介するの？そもそも、釣書を書くこと自体が無理なのでは？

孫左衛門の任務をこんな風に設定した以上、ストーリー構成上いろいろな困難があるが、それをクリアさせる方法は「一目惚れ」。可音を16歳まで育てあげることができたのはゆうの援助があったためだが、嫁がせることについては、茶屋家の跡取り息子である茶屋修一郎（山本耕史）が可音に一目惚れしてくれたから、以降トントン拍子に？

■□■メインは、男2人の生きざまを描くドラマだが・・・■□■

本作は2人の男の生きざまを描くドラマであり、少し予定調和的な感じがあるものの役所広司と佐藤浩市という2人の名優がそれを見事に演じている。そんな本作の配給をしたのが、ワーナー・ブラザース映画というのが面白い。『ラスト・サムライ』（03年）（『シネマルーム3』137頁参照）、『硫黄島からの手紙』（06年）（『シネマルーム12』21頁参照）でワーナー・ブラザース映画は、アメリカ側からみた日本（人）の心を描いていたから、それも「なるほど」と納得。しかし、本作が描く「忠義」をメインとした「武士道」は、『ラスト・サムライ』で描かれていた武士道より少し難しいうえ、主君の後を追っての「切腹」という美学はわかりにくいのでは？

他方、本作は男2人の生きざまをメインとするドラマ以外の面もある。つまり、見方によっては本作は男と女の恋の物語もいっぱい含まれているわけだ。そのメインは、「ロミオとジュリエット」のような波瀾万丈の恋物語とは正反対の、何の波瀾もない（したがってあまり面白くない？）修一郎への可音の嫁入り。しかし、そもそも大石内蔵助のご息女という武家の娘と、茶屋家という商家の跡取り息子との結婚ってうまくいくの？修一郎が一目惚れしたうえ可音も嫁入りをOKしたからといって、相性をいろいろとチェックすることもなく結婚させてほんとに大丈夫？本作で注目すべきは、このあまり面白くないメインの恋物語よりも年の大きく離れた孫左衛門と可音との間の微妙な感情の展開。孫左衛門は大石内蔵助への「忠義」と自分に与えられた「任務」として可音を育て、嫁入りさせようとしているのだから、ほんのちょっとでも可音への恋心などを持ったらえらいこと。他方、可音の方はそもそも周りに男がいないのだから、年頃になればすぐ身近の存在だった男・孫左衛門にほのかな恋心を持ったとしても不思議ではない。そして、女の子の場合その感情の発露がストレートだから、コトと次第によってはヤバイことに・・・？

さらに、16年間も事実上可音の母親代わり兼教育係になっていたゆうが元太夫だったという設定にはかなり無理があるが、こちらは大人の女として孫左衛門をどう見ていたの？男はそもそも恋に無器用だから、ゆうの気持は全く考えなかったといえればそれまでだが、いくら任務のためとはいえ孫左衛門は16年間も全く女と無縁だったの？そんなこん

なを考えると、ひょっとして孫左衛門とゆうの間も・・・？

■なぜ曾根崎心中が？こりゃちょっと無理筋では？■

「曾根崎心中」は、醤油屋の手代・徳兵衛が遊女のお初といひ仲になり、最後は心中で終わる悲しい物語。これは今風に言えば、1703年に実際に起きた心中事件に近松門左衛門がインスパイアされてつくった人形浄瑠璃だ。赤徳浪士の討入りから16年後の時代に、これが人気を博していたというのはホントらしいから、この芝居小屋で修一郎が可音に一目惚れしたという設定は納得できる。しかし、その後再三再四この人形浄瑠璃が登場してくるのは一体なぜ？

それは、修一郎と可音との恋物語の他、孫左衛門と可音との微妙な感情、ゆうの孫左衛門に対する複雑な想いなどの恋愛感情と死んでいく者への想いをオーバーラップさせようとする意図だが、そりゃちょっと無理筋では？だって、お初と徳兵衛の物語と本作のテーマとは、全然結びつくものが無いのだから。この人形浄瑠璃のシーンは映像的には美しいが、それを本作にコラボした(?)脚本には異議あり！

■第1のクライマックスは少し不自然。第2のそれは？■

可音は知性と品格、教養を兼ね備えた武家の娘だから、立ち居振る舞いにも凛とした美しさが求められる。そのため、そのキャスティングは難航したらしい。杉田成道監督は、最初に「吉永小百合さんや夏目雅子さん、宮沢りえさんがデビューしたての頃の雰囲気を持っている子はいませんか？」と言っていたが「そんな子がいたら、みんな使っていますよ」と言われたらしい。そりゃそうだ。しかして、可音役に抜擢された桜庭ななみの出来は？

それは観る人によって異なるだろうが、私にはイマイチ。もともと私は、時代劇での女性が濃い化粧をし、何重にも着物を来ている姿を見てもあまり美しいと思わないから、第1のクライマックスである可音の興入れシーンを見ても、可音にそれほど美しさを感じることができない。そもそも、今ドキの現代風な顔立の女の子に、あんな化粧やあんな着物で美しいと感じさせることは難しいのでは？

また、当初は孫左衛門が付き添うだけのさびしい行列だったのに、夕暮れが深まる中、次々と元赤穂の家臣たちが現れてお供を願い出るという構成にも私は少し異議がある。だって、興入れの日程はあらかじめ決まっているのだから、参加したいと思うのなら最初から孫左衛門の庵に集まればいいのか？このように、第1のクライマックスは少し不自然だが、無事興入れが終わった後に訪れる、第2のクライマックスは？

2010(平成22)年12月20日記